

21世紀に読むWilliam March— もう一人の「失われた世代の作家」

宮内 妃奈

戦争体験を本にした人物が自問自答する。

I say to myself: "I have finished my book at last, but I wonder if I have done what I set out to do?"

Then I think: "This book started out to be a record of my own company, but I do not want it to be that, now. I want it to be a record of every company in every army. ..." ¹

1933年に発表されたWilliam March (William Edward Campbell)の小説、*Company K*からの一節であるが、上記の自問は、将校 Joseph Delaney の名を借りた作家のものとも言えるかもしれない。² ウィリアム・マーチとは、何者か。

1893年にAlabama州 Mobileに生を受け、第一次世界大戦に海軍の一兵士として従軍した経歴を持つ、いわゆる「南部」出身の「失われた世代」の作家である。Earnest HemingwayやF. Scott Fitzgerald、William Faulknerなどの錚々たる顔ぶれの作家たちとほぼ同世代で、同時期にアメリカの文学界に存在し、様々な雑誌(むしろ商業性を無視した小さな出版社)に短編を発表し、独自の世界を作り上げた。これまでに三本の短編集と六つの長編が残されているが、³ ほとんど批評の世界では取り上げられていない。彼の作家活動のきっかけの一つは「戦争」であった。彼は海軍で、Mont Blanc、Soissons、VerdunやBelleaw Woodsなどのいくつもの戦いを経験し、勲章を受けている。Roy S. Simmondsによるマーチの伝記によれば、"For March, certainly to begin with, writing was a form of therapy. ...he was principally concerned in exorcising his own private demons." (31)と戦争による戦闘ストレス反応(PTSD)に対処するために「書き」始めたことが明かされて

いる。フォークナーやヘミングウェイと異なり実際の戦場で「兵士」として従軍し生き抜いたマーチの作品は、極めて残酷な、現実的な描写に溢れ、彼らの作品にはない異質な光を放っている。

113人の兵士の小話から構成される *Company K* には、Beidler が序文で指摘する通り、機械化された大規模戦争で死・暴力に直面する人間の極限状態が次から次に描かれている。

“[I]ndividual soldiers come relentlessly forward, one after the other, the living and the dead commingled, to offer grim first-person testimony; and in narrative after narrative, there is mainly just one fundamental fact of modern warfare: the fact of violent, ugly, obscene death.”(CK, xv)

これはもともと、既に発表済みの五つの短編をもとに変更が加えられて長編として再構成されたものなのだが、作品の特徴は大きく次の二点に看取できる。まず一点目は、複数視点の導入による、多数の事例の「並列」である。シモンズによれば、マーチが *Company K* の出版を模索していた際、多くの出版社が、当時、過剰に出回っていた戦争小説のジャンルに、さらに新しい作品を出版することに躊躇していた。*Company K* の出版においては、しかしながら、この従来作品にはない視点の導入による作品形態が影響したのではないかと推測できる。マーチは、“the experiences of one man”による“a far too one-sided, ostensibly autobiographical picture”ではない、“the reactions of men to war”(TWWM, 62.)を客観的に、提示することを追及した。⁴ フォークナーが1929年に *The Sound and the Fury* で示したのと同様に、ある意味一人称による「独白」とも言える複数のスケッチを多数「示し、並べる」ことによって、極めて客観的に戦争の「現実＝真実」を描き出そうとしたのだろう。⁵

さらに二点目は、皮肉なまでにリアルで残酷な、直接的な表現による「暴力の可視化」である。先に引用した冒頭の Delaney の自問自答は、次のような妻との会話に発展する。少し長いが、後に取り上げる作品“Nine Prisoners”と関連するので、すべてを引用したい。

[M]y wife spoke: “I’d take out the part about shooting prisoners.”

“Why?” I asked.

“Because it is cruel and unjust to shoot defenseless men in cold blood. It may have been done a few times, I’m not denying that, but it isn’t typical. It couldn’t have happened often.”

“Would a description of an air raid be better?” I asked. “Would that be more humane? Would that be more typical?”

“Yes,” she said. “Yes. That happened many times, I understand.”

“Is it crueler, then, for Captain Matlock to order prisoners shot, because he was merely stupid, and thought the circumstances warranted that, than for an aviator to bomb a town and kill harmless people who are not even fighting him?”

“That isn’t as revolting as shooting prisoners,” said my wife stubbornly. Then she added; “You see the aviator cannot see where his bomb strikes, or what it does, so he is not really responsible. But the men in your story had the prisoners actually before them... It’s not the same thing, at all.” (CK, 14-15. Underline is added.)

自分だったら捕虜を殺害するシーンは、とても残酷だから省くわという妻に、Delaney は「残酷さ」の意味を問いかけている。暴力が具体的に現実的に可視的に表現されればされるほど、人はそれを「より残酷」なものとして忌避する傾向がある。しかし、爆弾が庶民を巻き込んで大勢を殺すのも、兵士が捕虜を目の前に命令に従って引き金を引かねばならない状況も、そこに残酷さの程度の「差」はないはずである。Delaney は、どちらも戦争を引き起こした人間(every men)の“unending cruelty” (CK, 16)なのだと捉えている。マーチもこの問題に徹底的に拘り、書き続けた作家であった。

本論では、この *Company K* の前身である二本の短編、“Fifteen from Company K” と “Nine Prisoners” を取り上げて紹介したい。ウィリアム・マーチの作品が描く暴力を通して露見する人間の性(さが)は皮肉でありながら、時代を超えて「現代」にも通じる普遍的な性質を帯びている。インターネットやテレビの普及に

よって簡単に映像が手に入り、暴力を身近に感じる21世紀の今こそ、マーチの作品を読み直し、再評価できる時なのかもしれない。

“Fifteen from Company K”

マーチによって最初に発表された作品は、1929年に*Forum*に掲載された戦争ものの短編“The Holly Wreath”であった。オムニシエントな視点から描かれたこの作品は、砲弾の飛び交う戦場において、精神的に追い込まれ敵に自ら身を投げ出して殺されてしまう兵士たちの姿を描いている。その後次々と戦争を扱った短編を発表するが、その一つがスケッチ形式を用いて最初に書かれた“Fifteen from Company K”(1930)で、中西部に拠点を置く小規模の雑誌 *Midland* に掲載された。当初、マーチは50編近い話を一つの作品として考えていたが、最終的に出版社との共同で15編を抽出し、現在の形となって発表されることとなる。評価としては、“one of the most beautiful prose achievements I have read for a long time—genuinely great, not a single segment weakening!”(TWWM, 40)と読者から寄稿された記録があり、また、Edward O’Brienによるアンソロジー、*The Best Short Stories of 1931* に再収録され、*O. Henry Memorial Award Prize Stories of 1931* にも取り上げられていることから、アメリカ文学の文壇で認められている作品であることがわかる。⁶

*Company K*は、シモンズの詳細な分析から、計算された構成の中に113の小話が並列され展開されていることが明らかになっている。つまり、参戦以前の訓練の時期から終戦後という時系列上に、アメリカからフランスへと場所を変えて部隊が進攻する過程が描かれている。一方、“Fifteen from Company K”は、戦時中と終戦後の小話がむしろランダムに並んでおり、時系列の軸は見いだせない。それぞれ15のスケッチは、多様な兵士の姿を表しているが、その多くは「兵士」に求められる栄光、賞賛、勝利、英雄像とは全く無縁の現実である。汚い戦場に這いつくばり、傷の痛みに泣き喚く、無様な姿を晒すだけの卑小な兵士たちであり、また、終戦後「見せかけ」だけの賞賛を受け、むしろ辛酸をなめさせられる帰還兵たちの皮肉に満ちたりアルな姿である。

Corporal Lloyd Somervilleは毒ガスによる攻撃を受け、病院で死を待つ状態にある。死を前に何もできない無力感に、怒り、恐怖を感じるだけしかない。そして

そのやり場のない感情を看護師に爆発させる。

“This is pretty God-damned amusing for you, isn't it?” I said. She didn't answer me and I commenced laughing and crying and shouting at her every filthy thing I had ever heard; but she bent over me slowly and kissed me on the mouth.⁷

Private William Anderson は足のケガの手術に際して、麻酔を使えと医者を脅し喚いて、騒ぎ立てる。Private Edward Romano は戦場でキリストの幻影を見、非難し、泣き崩れてしまう。Lieutenant Edward Frankel は、退避壕の汚臭、体を這う虫、自らの汚れた爪に耐えられず死を決心するが、雑誌に載っていた女優、Lillian Gish の写真の小さな切り抜きに心を奪われ、それを希望にして生き延びる。Private Philip Calhoun の命を奪ったものは、砲弾ではなく、皮肉にも戦闘現場に唯一残っていた壁の崩壊によるものであった。また、「考えたら兵士ではいられない」(“NP”, 328) という徹底的に機械的な訓練を受ける軍隊では、考え、感じることは許されない。Sergeant Carroll Hart のスケッチは、瀕死の状態のドイツ兵と対峙し、何かを取り出そうとして懐に手を入れた彼に引き金を引いたことで、夜眠れない姿を映し出している。ドイツ兵が取り出そうとしたものは、娘らしき人物の写真であった。

これらはすべて、Private、Corporal、Sergeant、Lieutenant という位の付いた兵士たちの物語であり、それを「兵士」として読む限り彼らに煌びやかな栄光はない。ただし、彼らを戦争という圧倒的な暴力の中にある、一個の「人間」として読み直すとき、一種の憐れみ、同情が見いだせる。それがマーチの作品の魅力とも言えるのではないか。それは数少ないマーチ研究家の一人である Michael Routh がマーチの創造性に見出している “grimly ironic, yet deeply compassionate perspective on life”⁸ に通じるものである。先の Sergeant Carroll Hart の話には続きがある。上司である Sergeant に、その現場にいた Private Citron は彼の思いを汲み取って次のような言葉をかけている。

“Don’t blame yourself that way, sergeant,” he said, “anybody would have thought he was going to throw a grenade.” (“FCK”, 213)

この上司と部下の枠を超えた「一個の人間」同士のやり取りは、戦場において葛藤する人間の姿であり、支え合う姿であり、そこに何らかの希望が見いだせるようである。上司に言葉をかけた Private John Citron のスケッチには、戦場で破り捨てられた手紙を拾い、その手紙を書いた人物に思いを馳せている姿が描かれている。彼は、兵士というより、「考え、感じる」人間としてクローズアップされていると言えるだろう。その一方で、彼らと同じような場面に遭遇した Sergeant Marvin Mooney の行動は、全く異なっている。水を求めた瀕死のドイツ兵に対して、彼は、“I straightened out his head with my foot and I pounded his face with the butt of my rifle until it was like jelly. After that I opened my canteen and poured all the water I had on the ground, ...” (“FCK”, 211) という容赦のない仕打ちを与える。「兵士」としては許される行為であるかもしれないが、そこに「人間」としての賞賛はない。

終戦後の「兵士」こそ、さらに「栄光」とは無縁である。彼らは肩書を失った一個の個人でしかない。

Sergeant Arthur Crenshaw は、戦後、地元に戻ると自分の名の付いた祝いの宴席で、地元の経済界の名士に祝福され、賞賛されて迎えられる。しかしもちろん、それは「兵士」として戦った Sergeant Crenshaw に対するもので、Arthur Crenshaw のものではない。再出発のための資金が必要な Arthur に、支援の手が差し伸べられるはずもなかった。

That night as I lay awake and wondered how I could raise the money, I thought of Mr. Hawley’s [President of the First National Bank and Trust Company] speech in which he had declared that the town owed me a debt of gratitude for the things I had done which it could never hope to repay. So the next morning I called on him at his bank and told him of my plans and asked him to lend me the money. He was very courteous and pleasant about it, but if you think he lent me the five hundred dollars you are as big a fool as I was. (“FCK”, 206)

Corporal Sylvester Keith の場合は、さらに皮肉なものである。彼は、戦争を二度と起こさないために、若者に戦争への「憎しみ」や「恐怖」を教える組織を立ち上げる。

“I am planting in these fine young men such hatred of war that when the proper time comes they will stand up and tell the truth without fear or shame.” (“FCK”, 209)

しかし、結果として彼の組織に参加して集まっていた若者たちは、“anxious to protect their country from the horrors I had described” (209) と感じ、その町にできた国の軍事組織に参加し去っていくのであった。

このように、作品におけるすべてのスケッチは肯定も否定もされ得ない。また、善悪の判断も表明されていない。ただ、多様な人間の行為が並ぶだけである。作品に現れている人間は残酷で非情な存在でもあり、脆く弱く優しい存在でもある。手を失ってギタリストとしての夢を断たれた Leslie、兵役を逃れるために演じた狂気に自ら嵌り、現実との区別がつかなくなっている Howard など、15 編の中に様々なドラマが描かれ示されているが、それらを解釈するのは、読者にほかならない。

“Nine Prisoners”

1931年 *Forum* の12月号に“Nine Prisoners”が掲載された。これは Sergeant Pelton 下にある Corporal Foster の分隊が、捕虜にした22人のドイツ兵の殺害を命じられ実行するというものである。この捕虜殺害に関わった9人のスケッチが命令から実行、戦後に至る時系列で描かれている。今作は、発表されると同時に読者の間に大きな論議を巻き起こした。Delaney の妻が嫌ったように、現実的、直接的表現による残酷な「暴力の可視化」がマーチに対する辛辣な批判を巻き起こしたのである。それは何百万人ものアメリカ兵士の名を汚す作品だと非難するもの、また、根も葉もない作家批判を叫ぶもの、であった。ここに描かれている9名の兵士は、確かに無抵抗の捕虜の殺害という“raw”で“dirty”な命令を実行した。しかしながら、現場を逃走した Private Drury の “We’re prisoners too: we’re all

prisoners together!” (“NP”, 329)の言葉が端的に示す通り、彼らは、兵士として正
 当な行動をとれば「人間」として罪を背負わねばならず、その一方で「人間」として
 良識に従えば「兵士」として軍法会議にかけられ罪人となる、というどちらの道
 を選んでも生涯「安寧」は得られないジレンマに陥っている。「考えたら、兵士は失
 格だ」というルールの下、“under the circumstances there was no other way out”
 (“NP”, 329)な現状を読み取り、「考えすぎてしまった」Druryを除いてすべてが命
 令を遂行する「囚われた」兵士の姿なのである。

戦争においては、慈悲も正義も美徳もない。あるのはただ、正当化された理不尽
 な暴力だけである。Private Gordonの見たドイツ兵の殺害現場は、それを残酷にリ
 アルに表現している。

I wanted him to be killed instantly. He bent double, clutched his belly with
 his hands, and said, “Oh!...Oh!”...Then he raised his hands in the air, and
 I saw that most of his fingers were shot away and were dripping blood
 like water running out of a leaky faucet. “Oh!...Oh!” he kept saying in an
 amazed voice...“Oh! Oh! Oh!” Then he turned around three times and fell
 on his back, his head lower than his feet, blood flowing from his belly,
 insistently, like a tide, across his mud-caked tunic; staining his throat and
 his face. Twice more he jerked his hands upward and twice he made that
 soft, shocked sound. Then his hands and his eyelids quit twitching...
 (“NP”, 330)

このようなショッキングな表現がマーチの時代に許されたのか。シモンズは次の
 ように述べている。

It may all seem comparatively tame to the modern reader, but it should
 be borne in mind that at the time March was writing it was not permissible
 to portray man’s bestiality to man in the sort of language and narrative
 that demonstrates unequivocally the full degradation of war. (TWWM, 35-36)

マーチの作品は、時に“too unhealthy and decadent”(TWWM, 34)と出版社から拒絶されるほどであり、時代に合わなかった可能性は否定できない。しかし、シモンの指摘する通り、「現代の」読者であれば、彼の言葉、表現に正面から取り組み、再評価することができるのではないか。

「兵士」として捕虜殺害を実行せざるを得なかった彼らは、戦争がもたらす暴力、非情、理不尽、罪の意識に縛られ、決してその罪から逃れることはできなかった。Private William Nugent は戦後、警察官を殺す事件を起こして死刑に処せられる。Private Everett Qualls は、戦後手に入れたすべての財産である、家畜、作物、息子を病気で失ったとき、それを神による捕虜殺害に対する「罰」だと受けとめる。結果、彼はピストルで自分の命を絶つのだった。

このような「戦争」における、目を背けたくくなるような暴力を具体的にリアルに表現し、救いのない絶望的な状況を描くことで、作品は何を伝えているのか。それは *Company K* の中で Keith が述べる目的と一致するのではないか。

[I]f people were made to understand the senseless horror of war, and could be shown the brutal and stupid facts, they would refuse to kill each other. (“FCK”, 209. Underline is added.)

すなわち「戦争」に対する憎しみ、恐怖を与え、それによって生じる戦争忌避の感情を生み出すということである。これは、実は作家であるマーチの意思にも通じるものでもある。今作に寄せられた読者からの非難に対して、彼は最初で最後となるコメントを掲載している。⁹ その中で、

If there were a war impending, my conscience and my special knowledge would impel me to do what I could to prevent it. (TWWM, 54)

と、もし再び戦争が起こるような状況に差し迫られるようなことがあれば、彼は自分の良心と特別なknowledgeを使ってどんなことをしてでも食い止める努力をすると述べている。作家である彼が持つ「特別な知識」とは、すなわち「書く行為」によって伝えられるもの以外の何物でもない。Keithの言葉に表れている通

り、“the idea of gas attacks”や“the brutality of liquid fire”など、具体的に可視化できる表現で暴力を描くことによって、それが戦争回避への力となることを望んでいたのではないか。

第二に、捕虜殺害という限られた状況の限られた事例の中ではあるが、暴力的な状況の下に置かれた人間の、「兵士」という枠を超えた心的葛藤を描くことで、普遍的状況を生み出すことに成功していると言えるのではないか。“Nine Prisoners”の最後の語り手である Private James Wade は実は *Company K* の冒頭に登場する Delaney と同一人物である。すなわち冒頭で Delaney が作品の意義を “a record of every company in every army” と述べたように、どの人間にも起こり得るものとして、暴力が描かれているのではないか。

彼は、「戦争」について次のように述べている。

“I wish there were some way to take these stories and pin them to a huge wheel, each story hung on a different peg until the circle was completed. Then I would like to spin the wheel, faster and faster, until the things of which I have written took life and were recreated, and became part of the wheel, flowing toward each other, and into each other; blurring, and then blending together into a composite whole, an unending circle of pain... That would be a picture of war. (CK, 14. Underline is added.)

「戦争」とは、具体的な国や地域での限定された者同士の戦いではなく、むしろ、その総体であるということである。それぞれ個別の物語は一つに溶け込み、集約され普遍的な感覚「痛み」の連鎖として収斂される。

これは、さらに、砲弾でくぼんだ穴、荒れ果てた土地、死体はやがてきれいな草花で覆われ、そして、“In a year’s time you could never guess the things that had taken place there.” という事実には彼が違和感を覚え、戦争を生物学的に、科学的に捉え解釈するのではなく、むしろ、道徳的、倫理的な問題として捉えようとする次のような態度に通じるものである。彼は言う。

To me it has always seemed that God is so sickened with men and the things they do to each other that he covers the places where they have been as quickly as possible. (“NP”, 333)

荒廃した土地がやがて自然の力によって木々や草花に覆い尽くされるのは、神の仕業なのだと。戦争は、すなわち神と人間の間の罪の問題、人間の「終わりなき残酷さ」の問題として、個別の事情を取り払い「普遍的」に考えなければならない。その普遍性を理解することが大事であるということではないか。

ここにもまた、作家の意図とのつながりを意識せずにはいられない。先に引用した読者へのコメントで、彼が一番に強調したことは、作品は「フィクション」であり、9人のスケッチは特定の実在の誰かではなく「普遍的な」人間の行為であるということだった。

My story, “Nine Prisoners,” is, so far as I am aware, strictly fiction. I had hoped to make the men and their reactions universal in their implications, beyond military boundary lines... (TWWM, 54. Underline is added.)

この作品を読むには、*O. Henry Memorial Award Prize Stories of 1932*と*America Through the Short Story*に再録されているほか、*Forum*であればバックナンバーのPDFにアクセスすることが可能である。ウィリアム・マーチは、徹底した「リアリズム」(直接的な暴力表現)で人間の「生」の皮肉なまでの残酷性を描き、作品において「人間の本質」を見つめ、「普遍性」を希求した作家であった。このような、これまで取り上げられなかった作品が21世紀において読み直され、評価されることを期待して、本論の結びとしたい。

注

1 *Company K* (CK), p13.

2 Roy S. SimmondsはDelaneyをマーチの“alter ego”であると指摘している。(“An Unending Circle of Pain: William March’s *Company K*,” p37)

3 その他、短編集に含まれていない短編のほか、100話以上の寓話を制作している。

4 彼のこの目的は、*New York Times*のBook Reviewにおいて端的に指摘され評価されている。“Realizing the limitations of a single eye and a single mind in the confrontation of an event as vast as the war, [March] has drawn up *Company K*, 113 officers and men, to each has given, round-robin fashion, a bit of a vast unwritten novel... that lies behind ‘*Company K*’.” (Going, p434)

5 マーチの語りの形式は、少数の批判はあったものの、概ね“a valid and potent literary technique” (TWWM, 68)として受け入れられている。出版社の編集長である Harrison Smith も予想以上の売り上げに、手紙でマーチに喜びを表したほどであった。

6 *The Best Short Stories of 1931*には、フォークナーの“*That Evening Sun Go Down*”、フィッツジェラルドの“*Babylon Revisited*”も掲載されている。*O. Henry Memorial Award Prize Stories of 1931*には、フォークナーの“*Thrift*”が同時に掲載されている。フォークナーにおいては、興味深いことに、彼の保有していた蔵書一覧から *Company K* の他、マーチの作品を二作、所有していることがわかっており、彼がマーチの存在を知り、作品を読んでいた可能性を示すものとなっている。

7 “Fifteen from *Company K*” (“FCK”), from *The Best Short Stories of 1931*, p202.

8 Michael Routh, p106.

9 1932年2月の *Forum* の“*Our Rostrum*”上に掲載された。

参考文献

Blotner, Joseph L. *William Faulkner’s Library, a Catalogue*. Charlottesville: UP of Virginia, 1964.

Going, William T. *Essays on Alabama Literature*. Alabama: U of Alabama P, 1975.

— “William March: Regional Perspective and Beyond.” *Papers on Language & Literature* 13. 4 (1977): 430-443.

March, William. *Company K*. 1933. Tuscaloosa: The U of Alabama P, 1989.

— “Nine Prisoners.” *Forum*. 86. (December, 1931). 328-333.

— “Fifteen from *Company K*” from Edward J. O’Brien. *The Best Short Stories of 1931; and the Yearbook of the American Short Story*. Dodd, Mead, 1931.

Routh, Michael. “The Fiction of Pressure: William March’s Short Stories.” *The Mississippi*

Quarterly. 36. 2 (1983): 105-115.

Simmonds, Roy S. *The Two Worlds of William March*. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1984.

— “An Unending Circle of Pain: William March’s *Company K*.” *Ball State University Forum*. 16. 2. Muncie: Ball State University, 1975. 33-46.

— “A William March Checklist.” *The Mississippi Quarterly*. 28. (1975): 461-488.

